

講演＆ワークショップ
「気づく力」の鍛え方 開催報告

日時：2019年11月15日（金）19:00～21:30
場所：津市橋北公民館（津市）
講師：中村安希さん（ノンフィクション作家）

今年度第2回目の気づき合う講座「ダイバーシティ・スイッチ」（主催：三重県）を開催しました。当日は、企業、行政、NPO、個人などさまざまな48名が参加し、講座『「気づく力」の鍛え方』とふり回りワークショップを通して、ダイバーシティについて考えました。



「小さな声」に気づく力を鍛えよう

当日はノンフィクション作家の中村安希さんから『「気づく力」の鍛え方』というテーマで講演をしていただきました。

中村さんは「小さな声」に気づく、という観点から、小さな声とは何なのか、またどうすればそうした声を拾うことができるのか…などを、さまざまな取材を通じて多様な文化や価値観、生き方に触れてきた体験に基づいて具体的にお話いただきました。

参加者の感想より

- 他の方とのコミュニケーションから、新しい自分に気づき、自分にない考えを見つけました。
- ダイバーシティが身近になりました。これまで難しく考えすぎていたのかもしれない。
- 立場の弱い人の話を聴くことが、みんなが住みやすい社会をつくると感じました。
- 職場や家族に対して優しく関わっていきたい。

自分について話し、相手の話を聴く

講演後のふり回りワークショップでは、池山敦さん（皇學館大学教育開発センター准教授）が進行し、2つの問いかけをしました。（①あなたの周りにはどんな小さな声があるか、②小さな声をこれからどう聴いていきたいか）

参加者はまず個人の考えをワークシートに記入し、その後5～6人のグループになって考えた内容を共有しました。仕事で感じていること、家族の状況など身近な話題から共感が広まり、講演の内容を参加者が「自分ごと」として捉え、今後に活かそうとしていることがうかがえました。

小さな声をこれから
どう聴きますか？
（ワークのふせんより）

自分の常識と
他の人の想いは
異なるということを
心に留める

自分が現地まで
興味の深い
集りに参加
してやる

「小さな声と聴く」
という
「小さな声と聴く」
態度で向き合う

聴きたい相手の
言葉や行動を
受け止める

心の余裕を持って
声かけする
笑顔で受け止める

小さな声と聴くと
同時に、自分自身の
中の小さな声も
発信していくことが
大事

ダイバーシティ・スイッチ2019 とは…

「ダイバーシティ（diversity）」は日本語に訳すと「多様性」。三重県では、一人ひとりが尊重され、多様性が受容され、違った個性や能力を持つ一人ひとりがよい意味でお互いに影響し合うことで、相乗効果を社会に生み出す「ダイバーシティ&インクルージョン」の意味も込めて「ダイバーシティ」の言葉を使用しています。「スイッチ」は「切り替え」という意味です。社会の中のさまざまな多様性を感じる講座を通して、自分の中の価値観や他者との違いに気づき、他者を思いやることのできる多様性社会に切り替えていく、気づきの場として「ダイバーシティ・スイッチ2019」（全4回）を開催しています。

講演『「気づく力」の鍛え方』概要版

UNIVERSITY MIE
ダイバーシティみえ



講師 中村安希さん（ノンフィクション作家）

1979年京都府生まれ、三重県育ち。三重県立津高等学校卒業後、渡米。カリフォルニア大学アーバイン校芸術学部演劇科卒。香港大学大学院ジャーナリズム専攻修士課程修了。09年、47カ国を巡る旅をもとに書いた『インパラの朝』で開高健ノンフィクション賞を受賞。他の著書に、『Beフラット』『食べる。』『愛と憎しみの豚』『リオとタケル』『N女の研究』『ラダックの星』がある。

小さな声と大きな声

私の職業はノンフィクション作家です。小さな声を拾い、世の中に伝えることが仕事です。小さな声とは何か。3つ定義してみました。

- ①**少数派の意見VS大衆の意見**。小さな声は少数派の意見です。数が多いと声は大きくなります。
- ②**立場の弱い人VS立場の強い人**。社会の中で立場の弱い人の声は小さい。権力や社会的信頼の高い人の声は大きくなります。
- ③**個の声VS一般論**。個人の気持ち・考えは小さな声です。しかし一般論になると大きくなります。小さな声とは**言いにくいこと、言いにくいという状態**です。数の多い意見に対して、自分だけ違うと言いくくなります。小さい声を拾うためにすべきことは「言っても大丈夫」と思える環境を整えること。すなわち**「安全地帯」をつくること**です。

安全地帯のつくりかた

安全地帯をつくるポイントを3つお伝えします。

①相手の土俵で勝負する

私が「小さな声をどう聴くか」を学んだのは、カリフォルニア大学で出会ったリオ先生です。私が同大学に編入した2001年、同時多発テロがありました。街中が米国旗だらけになり、国民の80%以上が戦争を支持と報道されました。マイノリティだった私は、戦争やテロに対する自分の意見は言えませんでした。そんな時リオ先生が「お芝居をつくろう」と呼びかけました。テーマはかつてアメリカが原爆を落とした長崎。テロが起きたのはNYなのに、なぜ長崎？——そこに彼の巧妙さがありました。「過去の自分たちはどうだったのか」と現代のアメリカから、かつて自国が攻撃した長崎に土俵を変えたのです。結果、そこでなら自分の想いを語り、安心してものづくりができると多くの人が集まりました。このようにまずは相手の土俵にいかないと、小さな声を拾うことはできません。

②判断（批判）しない

家庭の事情。私が子どもの頃、父は「引きこもり」でした。しかし「父親は外で働くもの」という一般論があり言い出せず、外では「父は仕事をしている」と隠していました。長年私は両親とはほとんど連絡を取らずに生きてきました。それはうちの家庭には必要な距離で、一般論では片づけられない事情があります。しかし一般論からは「親不孝」「あなたがおかしい」と批判される。私は自分の家庭の話はしたくない、と思って生きてきました。

ある時、リオ先生がそんな私の状況に気づきました。全て打ち明けると、彼はそれが正しいとも間違っているとも言わず、ひたすら聴いてくれました。批判せず、私の話をただ聴いてくれたことが私を救ってくれました。

③自己開示する

『リオとタケル』に書いたリオ先生とタケルさんはゲイのカップルです。二人ともゲイであることを公表しています。二人の取材を通して最終的には私自身がバイセクシャルであることも本に書くことにしました。「小さな声」というと他人の声を拾うことに目がいきがちですが、あなたは自分の中にある小さな声に向き合えていますか。私は20代の頃、好きな女の人がいながら女の人が好きであることを認められませんでした。しかしリオ先生のようにオープンにしてくれると周りも心を開き、自分のことを話しやすくなる。当時、身近な友達に「LGBTの本を書いている。私もバイセクシャルでそれも書くつもりだ」と伝えると、周りで「実は、私も」というカミングアウトが次々に起こりました。誰もが人に言いにくいことを抱えています。自己開示する人が増えれば言いやすくなるのではないかと思います。

安全地帯の落とし穴

大きな声も、もともとは小さな声です。小さな声が集まり、メディアという拡声器を通して大きくなると**小さな声がやがて大きな声に変わるとき**がきます。そして私たちが弱者と一括りにしている中にも**弱者の中の弱者**がいます。

ライターになってからミャンマーの少数民族口ヒンギャの難民キャンプの取材をしました。難民の声は小さな声ですが、難民キャンプ内にも大きな声と小さな声があることに気づきました。イスラム教では声を上げるのは男性です。では女性の声は？女性の声を聴こうと色んなお宅を訪ね、様々な現実を知りました。一番小さな声は、子どもや女性まで近づかないと聴くことはできません。相手が「言いにくいことを話してみようかな」と思える環境をつくるには限りない努力が必要です。これで終わり…ということではなく、その中からまた小さな声が生まれる。私自身も努力しながら聴いていけたら、と思います。

実体験に基づくお話を通して、講師自身が自己開示をされたことで、受講者も自分の中の小さな声を見つめ直し、話しやすい雰囲気が生まれました。